

聴覚障害児への遠隔情報保障を担う支援学生の育成

ーオンライン研修と個別タイピング練習を組み合わせるー

○下中村武

古田弘子

（九州大学基幹教育院）（熊本大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: 聴覚障害 遠隔情報保障 支援学生

I. 目的

聴覚障害児は音声情報を正確に得ることが難しく、特に教科書以外の内容が扱われる授業では、児童によっては情報保障が不可欠である。しかし、従来一部で行われてきたのは難聴特別支援学級担任（難担）や学外スタッフ（要約筆記者や大学生ボランティアなど）による教室内の要約筆記やパソコンノートテイク（PCNT）であった。難担による情報保障については機器不足や技術不足の課題があり（下中村，2017）、聴覚障害児への情報量や即時性に限界がある。また、教室内の情報保障を行う場合、人材確保が課題となる。そこで本研究では、聴覚障害児への遠隔による情報保障を担う支援学生を育成し、その効果について検討することを目的とした。

II. 方法

発表者の 1 人の所属大学で、特別支援教育専攻学生と障害学生支援を行うサークルに所属する学生を対象に、主にソーシャルネットワークサービスを用いて、2020 年 12 月に募集した。その後、希望者に対して、遠隔情報保障プロジェクトの説明会を実施し、参加学生 5 名を決定した。

研修期間は 2021 年 1 月～2 月で、音声でのやり取り等に Microsoft Teams を、遠隔情報保障システムとして captiOnline（キャプションライン）を使用し、オンラインで週に 1 回 90 分、合計 8 回行った。内容は、発表者のこれまでの実践などを踏まえて検討したもので（下中村ら，2021）、1 回目がオリエンテーション、2 回目～7 回目が連係入力（連係入力）の練習や文字表記の確認、漢字の読みの挿入、8 回目が情報保障実践の振り返りであった（表 1 参照）。その他、参加学生には、民間団体ウェブサイトのタイピング練習を使用すること、平日は毎日 5 分間の設定で 1 回以上のタイピング練習を行い、その結果を表に記入し提出するように促すとともに、学生の練習継続意欲を考慮して、提出された結果に対しては毎回コメントを付した。これまでのタイピング練習記録や遠隔情報保障に関する知識・技術について分析する。

表 1 研修内容一覧

① オリエンテーションと入身体験
② 連係入力：入力目安あり・声かけあり
③④連係入力：入力目安あり・声かけなし
⑤ 連係入力：入力目安あり・声かけなし／読み挿入
⑥⑦連係入力：入力目安なし・声かけなし／読み挿入
⑧ 遠隔情報保障実践の振り返り

III. 結果と考察

1. タイピング技術に見られた変化

5 名とも研修開始前よりもタイピング練習記録が向上した（約 2 か月の伸び率は 20%～210%）。5 名とも 5 分間あたりの平均入力文字数が約 500 字以上となり、100 字／分以上となったが、入力変換にかかる時間や誤入力の訂正にかかる時間を考慮すると、150 字～200 字／分は必要である。どの程度の期間や練習回数で、上記のレベルに到達できるか、今後の記録の推移についても検討が必要である。

2. 遠隔情報保障に関する知識・技術に見られた変化

研修では、知識面として、ノートテイクの概要、PCNT の方法、遠隔情報保障の概要、遠隔情報保障の具体的方法、守秘義務について扱い、技術面として、captiOnline の使用方法や 2 人での連係入力、入力の際の文字表記について練習する機会を設けた。なお、研修⑤段階以降、当該学年の授業で使用する教科書を用い、学年別漢字配当表を念頭において漢字の読みがなを挿入したり、ひらがなで表記したりするように促しながら練習を行った。この点が大学での支援学生育成との違いである。

連係入力については、発表者が入力する学生を指名してから一定量の文章を聞き取って交互に入力する段階から練習を始め、徐々に①学生を指名せずに一定量の文章を聞き取って交互に入力する段階、②一定量の文章で区切らずに、入力する学生がどの程度入力するかを連係入力のペアと考えながら入力する段階を設定した。研修期間後半には、話すスピードがゆっくりめである場合には、スムーズな連係入力が可能となったが、話すスピードが上がると入力が安定しなくなるため、スピードが速い話にも慣れる練習をしていく必要があることが示された。

また入力の際の表記については、練習の際に適宜説明を行った。話者の表記（話者／）や、英数字の表記（1 桁は全角、2 桁以上は半角）、聞き取れなかったときの文字表記（***）、文字表記が不確かな場合の表記（カタカナにする）、漢字の読みの挿入、漢字とかなの表記の使い分けなどであった。話者の表し方や英数字の書き方などの基本的な表記はある程度身に着けることができるようになったが、漢字とかなの使い分けについては各々の表記の仕方が身についていることから、文字表記を統一するには時間がかかると考えられた。今後、入力後の振り返りの際に、表記について指導していくことが課題として挙げられた。

遠隔情報保障実践の振り返りから、発言が重なった際の入力の方法やグループワークでの情報保障の方法、話し言葉の特徴を踏まえた入力の方法についても研修に取り入れる必要があることが示された。

IV. まとめ

本研究では、オンラインによる研修と個別タイピング練習を組み合わせにより学生を育成した結果について報告した。研修開始当初に比べてタイピング技術などが向上したもの、今後も技術レベルの推移を検討する必要がある。なお、発表者らによる研修後に実施した遠隔情報保障の実践については別稿で発表予定である。

文献

下中村武（2017）中学校の通常の学級における聴覚障害のある生徒への支援の実態に関する調査研究ーノートテイクと手話通訳に着目してー。聴覚言語障害，46(1)，21-35。
下中村ら（2021）オンライン環境における障害学生支援の実践。基幹教育紀要，7，155-174。

付記

本研究は、第 36 回（2020 年度）マツダ財団研究助成（青少年健全育成）を受けて実施するものである。
（SHIMONAKAMURA Takeshi, FURUTA Hiroko）